

く、脱出感が続いたものは PPH 15 %、LE 4 %と有意に PPH に多くみられたが、軽微なものが多かった。高度の脱出がみられた PPH 3 例は結紮切除で再手術を施行した。直腸腫瘍を 1 例経験したが、3 週間後に自然閉鎖した。PPH は術後疼痛が軽く創処置も不要で、早期退院可能な良好な術式だが、術後愁訴が残る患者も少数認められ、術式の適応を慎重に判断することも必要と思われた。

II. 特別講演

「肛門疾患の新しい治療 — 主として PPH —」

東葛辻仲病院院長

辻 仲 康 伸

第 53 回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成 16 年 6 月 12 日 (土)
午後 3 時～5 時 30 分
会 場 新潟東急イン
3 階 華の間

I. 一般演題

1 下部消化管穿孔に対する手術症例の検討

池田 義之・香山 誠司・津野 吉裕
興梠 建郎

水原郷病院外科

大腸穿孔例（虫垂穿孔例を除く）24 例（男 17 例，女 7 例，平均年齢 67.9 歳）を対象に，その臨床病理学的背景，及び予後につき検討した。術後 30 日以内の死亡例を直接死亡例とし，大腸穿孔を生存例と直接死亡例に分けて比較検討した。穿孔原因は憩室 9 例，次いで癌 7 例で，穿孔部位は左

側結腸（S 状結腸，直腸）が 17 例と多く，直接死亡例はすべて左側結腸穿孔例であった。直接死亡例と生存症例との間で，Base Excess と平均血圧に有意差を認め，直接死亡例は男性に多く，白血球数減少例，遊離穿孔例が多い傾向を認めた。大腸癌穿孔例では，治癒切除例に長期生存例を認めた。重症度の推定に血圧低下や Base Excess の低下が有用である可能性がある。また大腸癌穿孔例で治癒切除を施行し得ることにより長期予後の改善が期待できる。

2 下行結腸癌の診断に先行した臍腫瘍（Sister Mary Joseph's nodule）の 1 例

森岡 伸浩・宮下 薫・藍澤喜久雄
奥村 直樹・清永 英利・西倉 健*

燕労災病院外科

新潟大学大学院医歯学総合研究科
分子・病態病理学分野*

内臓悪性腫瘍の臍転移は Sister Mary Joseph's nodule として知られており，予後不良の徴候であるが，その頻度は非常に少ない。今回我々は，下行結腸癌の診断に先行した臍腫瘍の 1 例を経験した。

症例は 77 歳女性。臍腫瘍に気づき近医受診。精査目的に当科紹介した。当科での臍腫瘍生検で腺癌の診断であった。精査の結果下行結腸癌が確認され開腹術を施行。開腹すると腹膜播腫を認めたが肝転移は認めなかった。臍腫瘍より浸出液を認めたこと大腸の通過障害が発生していたことより，臍切除と下行結腸切除術を施行した。現在外来で化学療法を施行中である。